

日本消化器外科学会雑誌編集後記

医学論文は何のために書くのでしょうか。医学の発展に貢献するためというのが究極の目的でしょうが、それほど大げさに考える必要はありません。論文は、自分のため、自分が勉強したことを公的に記録するために書くものです。論文に比べて、学会発表はまったく重みの違う業績です。論文を書くために要する時間と労力は学会発表よりはるかに多く、採用に至るまでの査読者とのやりとりは学会発表にはない過程であり、採用となり掲載されたときの喜びは当事者が最もよく知っています。論文にならない学会発表は打ち上げ花火のようなもので、一瞬しか目に触れませんし、記憶にも記録にも残りません。

論文はたとえ症例報告であろうともなにか「新知見」を含んでいる必要があります。たとえば、これまでに報告されていない疾患（病型、転移様式など）、ある疾病に関する新しい治療法、予後因子、などが一つでも示されていれば、科学論文として評価され掲載されます。日本消化器外科学会雑誌でも多くの症例報告を掲載していますが、新しい疾患の発見が最初は詳細に記述された症例報告であったということは珍しくありませんから、とても重要な種別の論文です。ですから、症例報告を書くときは、これまで報告された症例とどこが類似していてどこか異なっているのかを、一編一編読んで吟味する必要があります。その過程が知識を深めますし、表にまとめてみるとさらに情報が整理されて重要な点が明らかになります。このような執筆者の大変な努力の過程を経て投稿されてくる多くの論文を査読することは、大変勉強になりますし、やりがいのある作業です。当雑誌に努力の詰まった論文を数多く投稿していただきたいと思います。

(山本 順司)

2014年10月1日